主旨「仏教における死生観」

末木文美士

初期インド仏教においては、生老病死は苦と考えられ、そこからの解脱が求められた。しかも、仏教ではインドの輪廻の観念を受け入れたから、生老病死の苦は一回限りのものではなく、そこから解脱しない限り永遠に繰り返さなければならないと考えられた。「輪廻」にあたるsaṃsāraはしばしば漢訳では「生死」と訳されており、輪廻と生死が同義に考えられていたことが知られる。どうしてそのような苦が生ずるのかを考察したのが縁起説であり、完成した形では十二支からなる十二縁起として説かれた。無明があるから老死の苦があるのであり、無明の滅により老死の苦が滅し、それが解脱・涅槃である。

涅槃を得た後は生死がないとされる。しかし、有余涅槃といわれる現世における残余の生を伴う涅槃を離れ、完全な涅槃（無余涅槃）に入ったとき、それはどのような状態なのであろうか。空無に帰するのであろうか。それはこの世界の時間内存在を離脱するのであるから、一種の永遠の獲得ではないのか。初期の仏教では必ずしもその点に関してはっきりした答えは出されていない。むしろそのような問題は、解答不能の無記とされ、余計な思弁とされた。

しかし、ブッダ滅後、ブッダ崇拝が盛んになる中で、次第に涅槃に入ったブッダの永遠性が認められるようになっていった。とりわけ、ブッダの悟った真理をブッダと同一視する法身説は、ブッダの時間・空間における無限性に結びつくものであり、そこから如来蔵・仏性説へも発展することになった。

他方、空の思想においては、輪廻・涅槃という対立項を立てることが否定され、『中論』第十六章では、「涅槃に帰属することもなければ、輪廻を離脱することもない」(na nirvāṇasamāropo na saṃsārāpakarṣaṇam) と説かれたが、これは漢訳では、「生死を離れて別に涅槃有るにあらず」と訳され、東アジアで「生死即涅槃」説を展開させることになった。

ところで、信仰の世界では、死後の追善のための供養という行為は早くから行なわれていたが、大乗仏教のブッダ観は、来世観にも新しい要素を導入することとなった。それは来世浄土への往生という考え方であり、とりわけ阿弥陀仏の極楽浄土Sukhāvatī がその代表と考えられた。直ちに涅槃に至りえない場合、輪廻説に従って、天に生まれることを求める生天説は初期仏教以来のものであるが、浄土は天を超えた仏の世界であり、そこへの往生を求める新たな浄土信仰を生み出すことになった。

次に中国の場合を見てみよう。そもそも中国の知識人の間には来世観が乏しく、ましてや輪廻という発想は基本的には存在しなかった。それゆえ、仏教が中国に導入されたとき、輪廻説をどう受容するかということが大きな問題となった。仏教側が輪廻の主体としての「神」を立て、神不滅説を唱えたのに対して、中国の伝統説に立つ知識人は神滅説を立てて、いわゆる神滅不滅論争が闘わされた。仏教の輪廻説、とりわけ来世観は次第に受容されるようになったが、中国の伝統的な現世主義の影響を受け、禅の頓悟説のように、輪廻を経ずに悟りに達するという思想が発展した。

しかし、実際信仰の上では、追善供養の儀礼が大きく発展した。もともと中国の一般の信仰には祖先崇拝があり、きちんと供養されない死者の霊は鬼として危害をなすと考えられてきた。そこで、死者を供養する儀礼が発展したのである。阿弥陀仏信仰、地蔵信仰などのほかに、十王信仰が発展し、閻魔王をはじめとする地獄の王の裁きが信じられ、そのためにいっそう死者供養が盛んとなった。

日本においても、土着の宗教との習合は著しいものがある。日本にも輪廻の考え方がなく、理論的には生死即

涅槃的な発想を推し進めることになった。日本の場合、禅の頓悟よりも密教に由来する即身成仏の思想が発展した。中世には、本覚思想の進展で、生死即涅槃思想が極端まで推し進められ、生死無常のありのままのすがたが涅槃であると主張された。このような見方は、無常を無常のままに愛する日本の美意識を形成するひとつの契機になった。

他方、来世往生を求める浄土教も大きく発展した。とりわけ、法然から親鸞に至る流れで、称名念仏から信へと深められ、親鸞においては、往生即涅槃という即身成仏に近い思想へと変容された。しかし、一般社会では、来世浄土思想は土着の宗教における死後の祖先崇拝と結びついて、死後の法要は中国の場合以上に定着した。それが葬式仏教といわれる日本独特の仏教の形態を発展させた。

以上、きわめて大雑把にインドから東アジアに至る仏教の死生観を概観した。このように、仏教の死生観は、地域においてそれぞれ独特の形態をとり、それほど単純ではない。しかし、どの地域においても、一方で高度に理論的な死生に関する考察がなされるとともに、他方では民衆と密着して死者供養の儀礼を発展させた。従来、ともすれば理論面のみを対象として論ぜられることが多かったが、今日では、理論と儀礼を相関させながら研究することが定着しつつあり、成果をあげつつある。

二〇〇三年六月四日に行なわれたＣＯＥワークショップ「仏教における死生観」では、このような研究状況を踏まえて、海外の第一線の研究者を招いて討論が行なわれた。

主要な発表者であるジャクリーン・ストーン氏（Jacqueline Stone: Princeton University）は、本覚思想を中心とする日本中世仏教研究の第一人者であるが、日本中世の場合を中心に、死後が非常に大きな問題と考えられた時代に、仏教がその救いに大きな役割を果たしたこと、臨終のあり方が死後を予知するものとして重視されたことなどを論じた。こうして現代と相違する中世の発想を明らかにするとともに、それにもかかわらず時代を超えて一貫する問題があることを指摘した。

これに対して、以下の諸氏がディスカッサントとしてさまざまな角度からコメントを行なった。

ジャン・ノエル・ロベール（Jean-Noël Robert: École pratique des hautes études）

ポール・グローナー（Paul Groner: University of Virginia）

ダニエル・スティーヴンソン (Daniel Stevenson: University of Kansas)
ポール・スワンソン (Paul Swanson: 南山大学)
リンダ・ペンカワー (Linda Penkower: University of Pittsburgh)
ルチア・ドルチェ (Lucia Dolce: University of London)

さらに会場からも活発な意見が出されて討論された。その中で明らかにされたのは、死をめぐる仏教の思想が必ずしも論理的に整理されたものではなく、例えば、死後の状態がもう定まっているのに、追善が行なわれるような矛盾があったり、即身成仏するはずなのに、来世往生が求められたりする矛盾があるということであった。そこに死の問題の難しさがあるということが確認された。矛盾しているからおかしいというのではなく、むしろそのような矛盾を通して、さまざまな死生観の重層性を見ていくことが今後の課題とされよう。